

伊野川から忠別川までの地名⑪

前回は、松浦武四郎の蝦夷地開拓経営の建言、報告書をまとめた『燼心餘赤』から、安政三年(一八五六年)の記事に、上川のアイヌの人たちが、マシケ(増毛)、ル、モツペ(留萌)へ往来していることを紹介した。

その時の情報提供者が、旭川のイワシ、パカルで、イワン・パカルは、松浦武四郎の安政三年の有名な「ヌプシヤ(信砂)越え」にも同行し、安政四年の上川行にも同行した人物である。

留萌へのルートは、掲載地図の石狩川の支流のアヌトウラシナイ(an-nu-turasi-nav)我らよく登って行く・沢↓現・鱒取川、すなわち、雨竜郡の多度志へ行くの、この沢を登って行ったのである。多度志経由で、ル、モツペ(留萌)へ行っていったのである。

明治二十三年に上川を調査した永田

方正は、この鱒取川の地名解を次のように書いた。

アヌトウラシ(anu-turasi)鱒を捕りに登る川↓現・鱒取川

トラン(turasi)は、「」に沿って登る「意味で、」では、「この川に沿って登る」意味である。永田方正のインフォーマント(情報提供者)は、「この川に沿って登る」理由を、「鱒を捕りに、この川を登る」と説明したことが分かる。この永田方正の地名解から、この川の公式河川名が、「鱒取川」となったのである。他方、昭和三十五年、知里真志保は、旭川のアイヌの古老からの聞き書きを次のように記録した。

アヌトウラシナイ(an-nu-turasi-nav)我らよく登って行く・沢↓現・鱒取川、すなわち、雨竜郡の多

度志(タトウシナイtat-us-nav)樺・群生する・沢へ越えて行くの、この沢を登って行った。

写真は、「旭川市史編集―地名調査」のタイトルに付いたもので、右から

知里真志保、石山アツムヤシク、荒井源次郎、門野ナンケアイヌの各氏である。この写真は、荒井源次郎著『アイヌの叫び』に所収のもので、最高齢の門野ナンケアイヌエカシは、クーチンコロの孫で、明治十四年生まれであった。知里真志保は、この古老たちから、ル、モツペ(留萌)へのスタート地点の地名解を教えられて記録したのであろう。

なお、アイヌ語の交通路地名としてのトウラシ(turasi)は、「」に沿って登る「という意味で、多くはルトウラシナイ(ru-turasi-nav)道・それに沿って登る・沢」の形で、「鱒取川」のように、この川に沿って登り、目的地の多度志に行く沢川を意味するものである。

ルトウラシナイの対義語が、ルペシナイ(ru-pesi-nav)道・それに沿って下る・沢」である。この沢川は、山向こうから、この沢川に下って

旭川市史編集―地名調査 来るという意味である。この形では、ルペシ(ru-pesi)道・それに沿って下るもの川」の形が最も多い。町名では



北見市の留辺蘂町が最も有名である。また、上川町の留辺志部川は、北見峠で湧別川、浮島峠で渚滑川からのルペシペとしてよく知られている。

さて、「交通路としての江丹別川」としてアイヌの人たちの交通路を紹介してきたが、川を交通路として利用し、頻りに利用する川に、「ル(ru)道」が付いたのである。

しかし、No.119の松浦武四郎の記録のように、掲載地図のオサラツペ川の支流のトゥレプタウシナイ(turep-ta-us-nav)ウバユリの根・掘のついている・沢」から、雨竜川の支流のチカプオツ(cikap-ot)鳥が・沢山(いる)に山越えした実例のように、アイヌの人たちは、ル(ru)道」が付かない川も利用して、縦横無尽に往来していたのである。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

断章 旭川のアイヌ語地名研究

(122)

高橋 基

